

不登校、そして登校

—コウヘイと過ごした三年半—

八木 絹

第一回 深海を泳ぐ魚

「ちよつと学校に行つてみて、ダメならまたフリースクールに戻ればいいじゃない。あなたには居場所がちゃんとあるのだから」。この春、二年ぶりに学校という場所に復帰したコウヘイ。「無理しない、励まさない」をモットーに始まった中学校生活が、なんとか一学期を終えた。毎朝七時半に起きて「行つてきまうす」と出かける後ろ姿を見ていると不思議な気さえする。これはこの二年間当たり前の朝の風景ではなかったのだ。

ある朝突然

小学校三年生の三学期、二月のある朝、数日前から「遅れていく」「自転車を送つていつて」と言うようになつていたコウヘイが、校門で突然「行きたくない」と言い出した。理由は言わずにとにかく「行きたくない」を繰り返す。何とか自転車の補助いすから下ろして教室に連れて行こうとするが、動かない。あとで家で聞いてみると、クラスの仲間二人からいじめられているという。コウヘイはいわゆる「いじられ」役で、この二人から足をひっかけられて転ばされたり、「コウヘイをいじめようぜ」と言われて嫌な思いをしていたのである。しかし担任の先生にも友だちにも「じゃれ合っている」としか見えなかったという。翌日から

は家から出るのも難しくなった。二人の友だちには担任の先生がよく話してくれて最終的には謝ってもらったが、その間三週間かかり、コウヘイは家で不安な日々を過ごしていた。二人が謝ってくれたら登校できるだろうと期待していたが、三学期の間、登校することはできなかった。友だちとのトラブルは解決したかに見えても、「学校に行けなかった」事実の方が大きくなってしまったようだった。

四年生になり、クラスはかわらなかったがコウヘイは学校に行きだした。今度の担任の先生は新採用で、大学でキノコのエリンギの形の椅子を彫金で制作していたことを楽しそうに話すユニークな女性だった。コウヘイはこの先生のものびりした感じが合ったようで、週に一度は休んでいたがこのペースでなんとか冬までこぎ着けた。しかし三学期になるとまた行けなくなった。直接のきっかけはインフルエンザによる一週間の欠席だった。

「五年生になったら行くよ」と言っていたコウヘイは、五年生になった四月、二日ほど登校してみた。クラスもかわり新しい担任は無理な声かけはしない方針で、それはかえってありがたかったが、ついに五年生

の一年間、登校することはなかった。「二年間」と前述したのは全く登校しない五、六年生のこと、不登校は三年の終わりから始まっていた。

勉強についていけないわけでもなく、ひどいじめに遭っているのでもないのに学校に行かないのはなぜか、私はずっとそのことを考えてきた。三歳上の兄が小学校二年のとき一週間学校に行かず、その後は二、三カ月間頭痛がして、一〇時半ごろ登校したりという不安定な登校が続いたことがあった。直接の原因は学童保育所で年長の子に手下のように扱われるのが嫌だったことのようにだが、そのころ私は仕事が忙しく、週に何度か帰宅が一時頃になっていたことも響いたのではないかと思う、子どもに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。今回、コウヘイが不登校になり、すぐそのときのことや頭に浮かんだ。世間では子どもの不登校は母親の責任と思われている。それだけではないはずだと思いつつも、私の何がいけなかったか、自分を責めてばかりいた。

不安

四年生の冬から五年生の六月までの半年間、コウヘ

イはずつと寝てばかりいた。どんなに強く起こしても、大声で呼びかけても岩のように動かず、丸くなって眠っていた。昼過ぎに起きてきて、勉強をするでもなくテレビやゲームで過ごす。起きないのは物言えぬ子の抵抗だったのかも知れないといまは思うが、その頃の私はそんな風には考えられなかった。何が心配かといえ、学校に行かないで勉強はどうなるのか、学歴社会のなかで受験競争のルールに乗れなかったら将来どうやって食べていくのか、家に引きこもって暴れたり自殺したらどうしようというようなことだった。引きこもりの少年が起こす事件が報道されていたことも不安をおとした。

私は何とか学校に連れて行くこうとして、嫌がる息子を背負って家の階段から一緒に転げ落ちたり、学校の階段の踊り場で投げ飛ばされたこともあった。父親からは「学校にも行かないでお前の人生どうなる」と非難され、コウヘイは行き場を失っていた。そして次第に「死にたい」と口にするようになった。「俺、将来ダメ人間になるね」とつぶやく。家の前は通学路で、毎朝小中学生が川の流れるように登校していくのを眺めていると不思議な気持ちになった。

shaken baby という言葉がある。一時アメリカで問題になったが、体を激しく揺すられて脳出血を起こして死ぬ赤ん坊のことだ。「どうして起きないの!」、ある朝私は起きないわが子を揺すっているうちに首に手を回していた。体からサーツと血の気が引いて、すぐにその場を離れた。涙がドツとあふれて体が震えたあの感覚を忘れることはできない。本当に殺そうと思っただけではなく、不意にでもわが子を殺すかも知れないと思った自分が怖かった。

このことがあつてから私は無理に起こして学校に連れて行くことをやめた。もう五年生で、引きずって行くのは体力的に難しかったし、本人の意思がなければ動かないと分かっていたからだ。嫌がる子を親が引く張って学校に連れて行くことが、その形から「鯉のぼり」と呼ばれていることも知った。

コウヘイはこのとき深海の底を悠々と泳ぐ魚だったのではないかと思う。いつか水面に浮かび上がってくるときが来るのだが、それがいつかは誰にも分からない。子どもにとってはこの期間が大事なのだという人がある。十分に潜航しながら考える時間が必要なのだと。そう思えるには冷静にわが子の現状と将来を見つ

めて「待つ」必要があるが、これが難しいのだ。

居場所さがし

ひとりで抱え込んでいたのでは親子で負のスパイラルに入り込むと思い、あるとき隣に住む友人に話してみた。娘さんが小学校一年で不登校になった経験をもつ彼女は、「学校に行かないっていったコウヘイくんはえらいと思うよ」と言ってくれた。不登校の息子のために「泣き部屋」をつくってやった友人もいた。不登校の子をもつお父さんで、フリースクールを主宰している人に、「学校に行かなくて引きこもりにならなにかしら」と相談すると、「そんなことはない。不登校の子たちは生き生きと過ごしていますよ」と教えてくれた。「何としても学校に行かせなさい」とは誰も言わなかった。

こうした友人に支えられて私は、無理して学校に行かせることはないのではないかと考えるようになっていた。夫もコウヘイの窮状を見かねて「もう学校へは行かなくていいよ」と言ってくれた。肩の荷が下りた気持ちになった。男性は「男社会」で働き、学歴や社会的地位に縛られて、子どもの不登校を認めにくいよ

うだ。父親が現状を受け入れられるようになると状況はかなり変わるとよく聞く。

「学校には行かなくていい。ただ勉強だけは続けよう」と決めたら、コウヘイはだんだん元気になってきた。その頃私は自宅で仕事をするようになっていたので、十分にコウヘイに付き合うことができた。二人で上野の美術館や博物館を見て回った。コウヘイは二〇世紀初頭のパリで活躍した詩人であり劇作家でも画家でもあるジャン・コクトーが面白いと言った。毎日ゆっくり散歩して、近所のスターバックスでコーヒーを飲みながらいろんな話をするうちに、徐々に学校のことも語り出した。クラスの友だちが誰かにひどいことを言われるのを聞いていると、自分の方が傷ついてしまうことや、運動会の団体競技でバンブーダンスを一所懸命練習させられるけれど、どういう意味があるの？などと話してくれた。

コウヘイは小さいときから明るく元気で、それが過ぎて卒にはまらないところがある。二歳のときアメリカの保育園でのびのびと過ごした経験が「三つ子の魂」として生きているのかも知れない。いまの日本の学校は、偏差値輪切りの受験競争が低年齢まで影響してい

るからか、教員への上からの締めつけが厳しいからか、キヤパシティが非常に狭い気がする。もう少し学校に余裕があれば、コウヘイも楽しく行けたのではないだろうか。

そこで私は学校以外にコウヘイの居場所はないものか、探し始めた。隣市のシユタイナー学校も見学したがピンと来なかった。そんなとき、教育学者である友人が「三鷹市のコスモというフリースクールはいいよ」と教えてくれた。東久留米市で不登校の親の会の活動をしている友人もコスモを紹介してくれた。「二人の信頼できる人が推薦するのだから、いいところかも知れない」と思い、コスモのホームページをプリントして、部屋に何気なく置いていた。ある晩、それまで学校以外のどこかに行くなどということに興味を示さなかったコウヘイが「コスモの資料をしてみる」と言い出した。翌日、電車とバスを乗り継いで一時間かけて訪ねた。待っていたのは佐藤真一郎さん。コウヘイにとっては運命的な出会いといっていい。五年生の夏のことだった。

(つづく)

(やぎ きぬ・東京都在住)

〔図書紹介〕「教育改革」の

全体像に迫る本

山本由美さん(東京田中短大准教授)から研究所に佐貫浩・世取山洋介(編)『新自由主義教育改革の理論・実態と対抗軸』(大月書店 2008年)という書籍が寄贈された。ハードカバーのA4版321頁の大冊である。

世取山さんは次のように述べている。「本書は、新自由主義教育改革の理論とその構造、それが学校制度および教育現場にもたらす変容、そしてそれへの対抗軸について、教育学研究者グループに、政治学、行政学および法学を専門とする研究者が加わった学際的共同研究の中間的成果を取りまとめたものである」

本書は、二十の論文からなり、それらが四つの部に配置されている。「理論編」にあたる第一部「問題の所在と理論」、第二部と第三部は「実態編」にあたる。第四部は、「対抗軸の検討」。

編者を含め十七人が執筆されている。競争と市場化の果てにあるものは、何かが明らかにされる。但し難解な部分もあり、歯ごたえのある書物。(吉)